

僕のパートナー

神戸市立楠中学校3年
江畑恒輝

バドミントンのダブルスでは、1+1が、3にも、4にもなるのが理想のダブルスだという。二人の息がぴったり合うことで、それぞれが実力以上のものを発揮できる、ということだろう。

僕は、三年間部活のバドミントンで、耳に障害のある川本君とダブルスを組んだ。組んだのは一年生の時だった。初めの「校内ランキング戦」で僕が三位になり、川本君が四位に入った。それから僕のパートナーは川本君となった。

初めは難しかった。川本君は耳が聞こえない。ということは声による合図が出せないからだ。そのためか、僕らは試合中に何度もぶつかった。川本君のラケットが僕の顔や頭に当たることも少なくなかった。だから僕らは試合でもなかなか思うような結果を出すことはできなかった。

僕は、ハンデがあると思っていた。川本君は耳が聞こえないから、息も合わず、それぞれの実力も十分に発揮できないのかもしれない…。そんなことを考えていた。

二年になってしばらくたった時、僕はシングルスで川本君に勝てなくなった。川本君は耳が聞こえない分、相手のラケットがシャトルに当たった音を聞いて判断することはできないと思う。でも川本君は誰よりも練習を頑張っていた。本やビデオで誰よりも熱心に研究していた。

僕が疲れて少しだらだらとした練習をしてしまった時でも川本君は決して手を抜いた練習はしなかった。僕もたいりよく自信があったから、多分、気持ちの問題だったんだと思う。そんなパートナーの姿を見て僕は思った。足を引っ張っているのは僕のほうだ…。川本君は耳が聞こえないけれど、誰よりも頑張っていた。川本君の耳が不自由なのは個性であり、ダブルスでそれをハンデ、

みたいに言っている僕は、ただの言い訳をしている。例えば僕ならフットワークが人よりやや遅かった。でも、それは川本君が素早い動きでいつもカバーしてくれた。それなら、川本君は耳が不自由だけど、それは僕がカバーすればいいのだ。僕が川本君の動きに合わせることでできるようになればいい。動きで理解し合えないことがあるれば大きな口を開けてゆっくり説明すればいいのだ。お互いにカバーし合う。それができれば、1+1は3、とまではないかなくてもきつといいダブルスになると思うし、ハンデだと思っていたものはハンデじゃなくなるかもしれない。そう思えた。

そして練習を重ねて僕らがコートでぶつかることはなくなった。最後の総体*では、今までで最高の結果を出すこともできた。お互いにカバーし合えるようになったのだと思う。友達から、こんなことを聞かれたことがある。「川本と組むのは、正直、ハンデがあるとかは思わへんの**」

でも僕は自信を持って「全然思わへんで」と答えることができた。最初はそう思っていたかもしれないけれど、今は、あいつで良かったと心から思う。

耳が聞こえなくても、ことばを交わすのが難しくても、一緒に笑ったり、一緒に頑張ったりすることはできる。そして、やがて僕たちが巣立っていく社会が、障害のある人が心にハンデを感じないであたりまえに暮らしている、そんな優しい社会になっていけばいいなと心から思う。

僕は三年間の部活で、とても多くのことを学べたと思う。大切な僕のパートナー、今までありがとう。これからもお互い頑張ろう。

*全国中学生総合体育大会の略。

**（「思わないの？」の関西弁）

この作文は、平成17年度「心の輪を広げる体験作文」（内閣府及び都道府県・政令指定都市主催）中学生部門において最優秀賞を受賞しました。

词汇表

バドミントン：羽毛球

ダブルス：双打

息がぴったり合う：配合默契、合得来

部活：课外小组活动

ダブルスを組む：组成双打搭档

ランキング：排名、排列次序

パートナー：合作伙伴、搭档

合図：信号、暗号

ぶつかる：碰撞

ラケット：球拍

少なくない：不少

なかなか～ない：轻易不～、很难～

ハンデ：障碍

シングルス：单打

シャトル：羽毛球球体

だらだら：磨磨蹭蹭、松懈

手を抜く：偷懒、偷工

足を引っ張る：拖后腿

言い訳：辩解

フットワーク：脚下功夫、脚技

カバーする：弥补

練習を重ねる：反复练习

正直：老实、诚实

ことばを交わす：交谈

巣立つ：离巢、自立

我的搭档

据说在羽毛球双打比赛中，如果配对双方合作发挥出来的水平相当于三个人或四个人，则是最理想的组合。这是由于两个人配合默契，彼此都能够超常发挥的缘故吧。在初中的三年时间里，我和双耳失聪的川本是羽毛球课外活动小组的双打搭档。我们的搭档是从一年级开始的。在初次举行的“校内排名比赛”中，我获得第三名，川本名列第四。从此，川本成了我的搭档。

我们最初的配合并不顺利。因为川本耳朵听不到声音，自然不能用声音发出信号。或许这一原因，我们在比赛中经常相撞，川本的球拍打在我脸上或头上的时候也不在少数，所以我们在比赛中总是不能取得理想的成绩。

当时，我认为彼此之间存在障碍。也许是因为川本耳朵听不到声音，致使我们步调不一致，彼此的实力得不到充分的发挥。

不过，在升入二年级不久，我在单打比赛中便不敌川本了。虽然川本耳朵听不见，不能通过对对方球拍打在球体上的声音来进行判断，但他在训练中比任何人都要刻苦。他通过书本和电视潜心琢磨，其热心程度无人能及。在我感到疲劳，训练有些松懈的时候，川本也绝没有懈怠过。我对自己的体力是有信心的，我想这多半是我的情绪在作怪。看到搭档这股拼劲，我不由得感到是自己拖了比赛的后腿。川本虽然耳朵听不见，但他比任何人都要顽强，耳

朵失聪是他的个性特征，将其视为障碍，不过是我在为自己开脱罢了。从我自己来说，脚下功夫不够硬，经常是靠川本的及时跑动来弥补我的弱点，如果川本耳朵听不见的弱点能由我来辅佐，来配合川本的动作就好了。彼此配合有不协调的地方就张大口型慢慢解释，彼此弥补对方的不足。这样，两个人的合力所发挥出来的水平即使比不上三个人，肯定也是完美的组合，原本意识中的障碍也许不再成为障碍。

于是，经过反复的训练，我们在球场上不再相撞了。从最后的“全国中学生综合体育大会”成绩来看，我们打出了迄今为止最好的水平。因为我们彼此都能够为对方补漏了。朋友曾经问过我：“说实话，你不认为和川本搭档存在障碍吗？”，对此，我很有信心地回答：“一点儿也不认为”。也许最初我是那么想过，而现在我由衷地认为我们所取得的成绩是在川本的努力下获得的。

即使听不到声音，不能用语言进行交流，但我们一样可以共同欢笑，协力拼搏。并且，衷心希望不久的将来我们能构筑一个和谐的社会，能让残疾人感受不到障碍的存在，正常地生活。

三年的课外小组活动使我学到了很多。我所珍视的搭档，谢谢你以往给予我的许多。在今后的人生历程中彼此共勉吧！

（编辑部译）